

Ida Bromley, M.C.S.P. 著

田口順子・他 訳 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

(原著第2版)

四肢麻痺と対麻痺のリハビリテーション

鈴木 正彦 (国立身体障害者リハビリテーションセンター)

待ち望んでいた“四肢麻痺の理学療法”の手引書、実用書が遂に出た！ というのが本書を手にした実感である。

昭和50年、私共のスタッフが、約1年にわたるストックマンデビル病院留学から帰国して以来、我々の脊髓損傷に対する技術は明らかに向上した。間もなく本書の原著第1版が彼のもとに送り届けられ、著者ブローミー女史の指導結果と、彼女の著書の両面から、ストックマンデビル病院と著者の脊髓損傷に対する素晴らしい治療技術を知った私は、一日も早くその技術が日本のPTの中に広まることを期待していたのである。

本書には、まず四肢麻痺患者の多岐にわたる臨床像の全容が要領よく示され、それらに対して行われる医学的治療の概略が紹介されて、患部および医学的処置の全体像把握の目的を果している。また第2版で追加された第4章も、治療中しばしば確認を必要とする情報を簡略にまとめて提供している。

理学療法に関して著者は“ここに述べる治療は、多くの症例から見出したいくつかの方法で、ほんの僅かなヒントに過ぎない。決して決定的絶対的なものではなく、治療上のひとつの指針に他ならない”と謙虚に

述べている。しかし四肢麻痺、対麻痺のリハビリテーションは、患者にとってもPTにとっても非常に難しく厳しいものであり、“患者はPTを信頼していわれたことを確実に行うべきであり、PTは正確な知識と熟練に基づいて、患者にさせることは何であるかを的確に把握すべきである”と述べ、PTが将来への展望をもって、安全にケアをすすめるようきびしく求めている。

治療技術は、急性期の理学療法、初期の理学療法、セルフケア、マット訓練、車椅子とその管理、トランスファ、歩行訓練についてそれぞれ損傷レベル毎に、PTが何をなすべきか、何をしてはならないか、患者に何をさせてはならないか等について具体的に述べている他、超高位損傷、不全損傷、小児の脊損、合併症についても述べている。また各種スポーツについても頁をさき、最後に環境・交通手段・教育・職業を含めた社会復帰についても述べている。

全体にわかり易いイラストを多用して説明しており、初めて四肢麻痺患者の治療にあたる者にとっても、また学生にとっても頼もしい手引書となるであろう。

その他、臥床中の褥創予防の責任は医療チームにあるが、動けるようになれば患者に移管されるべきであ

る等責任の所在の明確化について、クッションの弾力が急に低下することがあるので定期的なチェックが必要であること、痙性の予防に初期の注意が大切なこと、十分な注意にもかかわらずなお出現する強い痙性への対策として具体的ADL各場面での抑制法など、経験に裏打ちされた助言と警告が随所にみられる。

またバランス訓練に関して、あらたな姿勢感覚とバランスコントロールの獲得が、日常生活動作の基本であるとの指摘は、特に注目すべきことであろう。

著者は、本書のはじめに、“恐怖と問題に満ちた未知と非現実的な世界に突き落とされた患者の周囲に、安心した雰囲気を作り、患者に自信を取り戻させるために、チームメンバーの専門性と全人格が要求される”ことを強調している。そして最後を“地域コミュニティに患者を入れていくには病院内外で患者と共に働いている人達の間でのチームワークが必要である。このことが、リハビリテーションを成功させる鍵である”と結んでいる。専門性の確立とチームワーク、これが本書を貫く思想であろうか。

おわりに、原著第2版発行と同時に、内容を完全に咀嚼・吸収・同化された田口・新藤の両氏が、翻訳出版を実現して下さったことに、心からお礼を申し述べたい。

我々は、本書から多くの事柄を学びとり、治療に役立てると共に、なお一層優れた技術を追求めてゆくことによって、本書出版のために御努力頂いた多くの方達の労にむくいるべきであろう。

(B5, 頁216, 図191, 写真8, 1982, ¥3,900, 千300, 医学書院刊)